

# コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2023年9月8日

Nat Med: パンデミック襲来から2年後のロングコロナの状況

## 【松崎雑感】

新型コロナ感染者が訴えるロングコロナ症状は、感染しない人々でも、日常生活で発生し得る症状がほとんどです。したがって、感染者と非感染者に、80項目の症状の有無を調査して、感染者に有意増加の症状を選び出すことが必要です。その手法で、新型コロナが、感染しなかった人々より、どれくらい障害が多く見られたかを調査した、コロナの疫学調査では非常に有名な米軍退役軍人医療ケアデータベースを活用した報告です。

## パンデミック襲来から2年後のロングコロナの状況

Bowe B, Xie Y, Al-Aly Z. **Postacute sequelae of COVID-19 at 2 years**  
[published online ahead of print, 2023 Aug 21]. *Nat Med*.

2023;10.1038/s41591-023-02521-2. doi:10.1038/s41591-023-02521-2

現在までのロングコロナの知見は、パンデミック初年度の患者に関するデータであり、その後の変化が明らかでない。

今回、アメリカ退役軍人医療システムのデータを活用して、パンデミックから2年後までのロングコロナ状況を解析した。

対象は非感染者598万人と感染者14万人弱。ロングコロナ症状は80項目。

非入院感染者の感染から6か月以降の死亡リスクは、非感染者と比較して有意な増加は見られなかったが、入院感染者の死亡リスクは、2年後も非感染者より有意に高くなっていた。

80項目のロングコロナ症状（ロングコロナ症状と言っても、コロナ特有の症状はごくわずかであり、大部分がコロナ感染がなくとも生ずる症状である：松崎）のうち、非感染者と有症率に差がなかったロングコロナ症状の比率は、非入院感染者で69%、入院感染者で35%だった。

パンデミックから2年後の時点で、ロングコロナにより失われた障害調整生命年（disability-adjusted life years (DALYs)：障害調整生命年とは、病的状態、障害、早死により失われた年数を意味した疾病負荷を総合的に示す指標）は、非入院感染者1000人あたり80.4年、入院感染者1000人あたり642.8年となった

（これは、非入院感染者一人あたりほぼ1か月、入院感染者一人あたり8か月の体調不良期間がロングコロナで発生したという風に換算できる：松崎）。

感染から2年経過すると、多くのロングコロナ症状は低下するが、ロングコロナがもたらした正常な社会活動を阻む体調不良の総量は、実に甚大であり、新型コロナウイルス感染によるロングコロナに苦しむ人々に対する治療および生活保障の取り組みが必須であることが示された。